

原典 · 日本文化论

YUANDIAN · Riben Wenhua Lun

王秋菊◎编著

北京大学出版社
PEKING UNIVERSITY PRESS



21世纪日语系列教材

日本国際交流基金「日本研究機関支援プログラム」助成

原典·日本文化论

王秋菊 编著



北京大学出版社
PEKING UNIVERSITY PRESS

图书在版编目(CIP)数据

原典·日本文化论 / 王秋菊编著. —北京: 北京大学出版社, 2015.3
(21世纪日语系列教材)

ISBN 978-7-301-25464-6

I. ①原… II. ①王… III. ①日语-高等学校-教材 ②文化-研究-日本 IV. ①H36.

中国版本图书馆CIP数据核字(2015)第023372号

书 名	原典·日本文化论
著作责任者	王秋菊 编著
责任编辑	兰 婷
标准书号	ISBN 978-7-301-25464-6
出版发行	北京大学出版社
地 址	北京市海淀区成府路205号 100871
网 址	http://www.pup.cn 新浪微博:@北京大学出版社
电子信箱	zpup@pup.pku.edu.cn
电 话	邮购部 62752015 发行部 62750672 编辑部 62759634
印 刷 者	三河市博文印刷有限公司
经 销 者	新华书店
	787毫米×1092毫米 16开本 12.5印张 190千字
	2015年3月第1版 2015年3月第1次印刷
定 价	36.00元

未经许可,不得以任何方式复制或抄袭本书之部分或全部内容。

版权所有,侵权必究

举报电话: 010-62752024 电子信箱: fd@pup.pku.edu.cn

图书如有印装质量问题,请与出版部联系,电话:010-62756370

序にかえて

人類は長い歴史の営みのなかで、繊細ですどく研ぎ澄まされた感覚や高度な知的・精神的活動にもとづいて獲得した成果を、数限りない方法で表し、伝え、蓄積してきた。それは文学・美術・音楽・舞踊などをふくめた芸術とよばれる分野の成果であったり、学問・思想・宗教など主として知的活動分野の成果であったりした。もちろんこれらはたがいに分けることのできない結びつきをもった、達成度の高い成果の積み重なったものである。その一方で、これらの根底には人類社会がその各時代に日々の暮らしのなかで長年にわたって形づくってきた生活の単位である家族・血縁関係や地域社会から国家にいたるさまざまな単位の共同体関係のあり方や、たがいに異なる習慣とよばれるような、いわゆる「生活文化」もある。前者も後者もふくめてこれらをここでは「文化」とよんでおこう。

とはいえ、この「文化」という言葉に対して「文明」という概念もある。この言葉の違いは何か。ここで説明することはやめておこう。各人各様の使い方をしているのが現状だからである。しかも、世界にはこれまた数限りない言葉があり、それこそは芸術も学問・思想も、いや感覚のあり方や思考や論理の様式から習慣さえも根底で規定する要因でもある。ここに世界各地に多様でたがいに異なる「文化」が並存し、交流も生まれる。

こういうわけで、ある国の過去から現代にいたる「文化」の特質を体系的な「文化論」として語り、あるいは語られたものを理解するのは大変な知的努力をとまなう作業になる。しかし、世界の一体化が急速に進む現代世界では、そのより良いあり方を築くために「異文化」間の相互理解の促進が必要不可欠で緊急の課題となっている。

この大変な仕事の素材としてここに編纂されたのが本書『原典・日本文化論』である。

本書編纂の直接の目的は、中国で日本の文化や社会の特質について考えようとする大学院の院生やその授業を担当する教師たちが共に学びあうために活用できる教材をつくることにある。なぜ、「原典」の必要があるのかは、上に述べたように言語こそはある意味で、あらゆる文化の根底を規定するからであり、「原典」を通じてその言語表現を深く理解

し、読み解こうと努力することによってこそ、その文化の特質のいっそう深い研究と理解を目指すことができるからである。そのため、この教材は日本語を相当理解できる能力のある日本語専攻の大学院生たちが使うことを目指したものになった。

ここには、さまざまな学問分野の視覚と方法にもとづいて、近現代の日本人だけでなく中国人や他の外国人たちが、日本文化論・日本社会論・日本人論などを論じた作品の主要部分が紹介され、その解説や参考文献が何人かの執筆者によって書かれている。しかし、それは各執筆者の意見であり絶対的なものではない。学ぼうとし、活用しようとする人たちのあくまで手引きだと考えてほしい。それとともに、いずれもそれぞれの原典の著者が著者自身のおかれた時代と各人の課題意識をもって書かれた作品であることをかたときも忘れないでほしい。だから、その時代やその著者の社会への意識と態度そのものをも研究する心構えをもって活用してほしい。

王秋菊教授の依頼でここに、本書の執筆分担について明記しておきたい。

「日本人による日本文化論」の解説は井口和起、王岩、北野裕通で担当した。柳田国男の『遠野物語』をはじめとする民族学、歴史学などの領域の原典解説は井口和起が執筆し、川端康成の『美しい日本の私』など文学方面の書目選定とその解説は王岩博士が担当した。また、本書の編著に当たって最初から色々アドバイスして頂いた北野裕通教授が哲学分野の3篇を解説して、「中国人・その他の外国人による日本文化論」の解説等は、王秋菊教授が執筆した。

このような、ある意味できわめて大胆な本書の編纂は、博識で多くの専門家たちとの人的なつながりをもって精力的に教育研究活動を続けてこられた東北大学・中日文化比較研究所長王秋菊教授でなければできなかった仕事であろうと私は思っている。しかし、協力者として失礼を顧みずいえば、本書はまだその第一歩の作品に過ぎない。採用した原典の選び方も十分に練り上げられたものというにはいささかのためらいを感じている。

それだけに、これを出発点にしていっそう質の高いものをつくりあげていく仕事に王教授が取り組まれていくことを期待したいし、このような「まえがき」の執筆の榮に浴した筆者もその努力をする決意を表明しておく。それにもまして、より良いものをつくりあげていく仕事に力をかしてくださるのは、だれよりも本書を活用して共に学びあってください院生や先生方の忌憚のないご批判やご注文である。このことを最後に切にお願いして「まえがき」とする。

2014年8月

井口和起

目次

日本人による日本文化論

武士道	新渡戸稲造	3
東洋の理想	岡倉天心	10
遠野物語	柳田国男	17
現代日本の開化	夏目漱石	24
和歌について	西田幾多郎	30
東洋的な見方	鈴木大拙	36
生花について	西谷啓治	41
雑種文化	加藤周一	48
日本の思想	丸山眞男	54
文明の生態史観	梅棹忠夫	60
タテ社会の人間関係	中根千枝	66
美しい日本の私	川端康成	72
義理と人情	源了圓	83
坂の上の雲	司馬遼太郎	89
「甘え」の構造	土居健郎	95
あいまいな日本の私	大江健三郎	101

中国人・その他の外国人による日本文化論

日本雑事詩	黄遵憲	110
記東俠	梁啓超	119
象牙の塔を出で・後記	魯迅	124
日本論	戴季陶	131
日本文化を語る手紙(その二)	周作人	138
日本人の生活文化	郁達夫	144
「縮み」志向の日本人	李御寧	151

日本文化の眞髓…………… 小泉八雲 157
日本精神…………… ヴェンセスラオ・デ・モラエス 164
日本人の行動パターン…………… ルース・ベネディクト 171
徳川時代の宗教…………… R. N. ベラー 178
日本文化私観…………… ブルーノ・タウト 186
あとがき…………… 194

日本人によ
る日本文化論

武士道

新渡戸稲造

○ 道徳体系としての武士道

武士道はその表徴たる桜花と同じく、日本の土地に固有の花である。それは古代の徳が乾からびた標本となって、我が国の歴史の腊葉集中に保持せられているのではない。それは今なお我々の間における力と美との活ける対象である。それはなんら手に触れうべき形態はとらないけれども、それにもかかわらず道徳的雰囲気を香らせ、我々をして今なおその力強き支配のもとにあるを自覚せしめる。それを生みかつ育てた社会状態は消え失せて既に久しい。しかし昔あつて今はあらざる遠き星がなお我々の上にその光を投げているように、封建制度の子たる武士道の光はその母たる制度の死にし後も生き残って、今なお我々の道徳の道を照らしている。(略)

私の試みはむしろ第一に我が武士道の起源および淵源、第二にその特性および教訓、第三にその民衆に及ぼしたる感化、第四にその感化の継続性、永久性を述ぶるにある。これら諸点の中第一はただ簡単かつ大急ぎに述べるに止める。然らずんば私は読者をば我が国史の紆曲せる小路にまで連れこむことになるであろう。第二の点はやや詳細に論じよう。けだしそれは国際倫理学および比較性格学の研究者をして我が国民の思想および行動のやり方について興味を覚えしめるだろうから。残りの点は余論として取り扱うであろう。(略)

○ 仁・惻隱の心

愛、寛容、愛情、同情、憐憫は古来最高の徳として、すなわち人の靈魂の属性中最も高きものとして認められた。それは二様の意味において王者の徳と考えられた。すなわち高貴なる精神に伴う多くの属性中王位を占むるものとして王者的であり、また特に王者の道に適わしき徳として王者的であった。慈悲は王冠よりも善く王者に似合うとか、慈悲

は王笏をもってする支配以上であるとか、これを言葉に表現するにはシェイクスピアを必要としたが、これを心に感ずるにはあえて彼を要せず、世界各国民皆これを知ったのである。……仁は柔和なる徳であって、母のごとくである。真直なる道義と厳格なる正義とが特に男性的であるとすれば、慈愛は女性的なる柔和さと説得性ともつ。(略)

幸いにも慈愛は美であり、しかも稀有ではない。「最も剛毅なる者は最も柔和なる者であり、愛ある者は勇敢なるものである」とは普遍的に真理である。「武士の情」という言は、直ちに我が国民の高貴なる情感に訴えた。武士の仁愛が他の人間の仁愛と種別的に異なるわけではない。しかし武士の場合にありては愛は盲目的の衝動ではなく、正義に対して適当なる顧慮を払える愛であり、また単に或る心の状態としてのみではなく、生殺与奪の権力を背後に有する愛だからである。(略)

○ 自殺および復仇の制度

まず自殺について述べるが、私は私の考察をば切腹もしくは割腹、俗にはらきりとして知られているものに限定することを断つて置く。これは腹部を切ることによる自殺の意である。「腹を切る？何と馬鹿げた！」—初めてこの語に接した者はそう叫ぶであろう。それは外国人の耳には最初は馬鹿げて奇怪に聞こえるかも知れないが、シェイクスピアを学びし者にはそんなに奇異なはずはない。何となれば彼はブルトゥスの口をして、「汝(カエサル)の魂魄現れ、我が剣を逆さまにして我が腹を刺せしむ」と言わしめている。また近代のイギリス詩人がその『アジアの光』の中にて、剣が女王の腹部を貫くと詠ずるを聴け、一何人も野卑な英語もしくは礼儀違反をもって彼を責めないのである。(略)

切腹が我が国民の心に一点の不合理性をも感ぜしめないのは、他の事柄との連想の故のみではない。特に身体この部分を選んで切るは、これを以て靈魂と愛情との宿るところとなす古き解剖学的信念に基づくのである。モーセは「ヨセフその弟のために腸(心)焚くるごとく」と記し(創世記四三の三〇)、ダビデは神がその腸(あわれみ)を忘れざらんことを祈り(詩篇二五の六)、イザヤ、エレミア、その他古の靈感を受けし人々も腸が「鳴る」(イザヤ書一六の一)、もしくは腸が「いたむ」(エレミア記三一の二〇)と言った。これらはいずれも日本人の間に行われたる、腹部に靈魂が宿るとの信仰を裏書きする。(略)

私は自殺の宗教的もしくは道徳的是認を主張するものと解されたくない。しかしながら名誉を高く重んずる念は、多くの者に対し自己の生命を絶つに十分なる理由を供した。

名誉の失われし時は死こそ救いなれ
死は恥辱よの確實なる避け所

と、ガースの歌いし感情に同感して、いかに多くの者が莞爾としてその靈魂を幽冥に付したか！武士道は名誉の問題を含む死をもって、多くの複雑なる問題を解決する鍵として受け入れた。……私はあえて言う、多くの善きキリスト者は、もし彼らが十分正直でさえあれば、カトーや、ブルトゥスや、ペテロニウスや、その他多くの古の偉人が自己の地上の生命を自ら終らしめたる崇高なる態度に対して、積極的賞賛とまでは行かなくても、魅力を感じずることを告白するであろう。(略)

○ 武士道の感化

武士道はその最初発生したる社会階級より多様の道を通りて流下し、大衆の間に酵母として作用し、全人民に対する道徳的標準を供給した。武士道は最初は選良の光栄として始まったが、時をふるにしたがい国民全般の渴仰および靈感となった。しかして平民は武士の道徳の高さにまでは達しえなかつたけれども、「大和魂」は遂に島帝国の民族精神を表現するに至った。もし宗教なるものは、マシュー・アーノルドの定義したるごとく「情緒によって感動されたる道徳」に過ぎずとせば、武士道に勝りて宗教の列に加わるべき資格ある倫理体系は稀である。本居宣長が

敷島の大和心を人間はば
朝日に匂ふ山桜花

と詠じた時、彼は我が国民の無言の言をば表現したのである。

しかり、桜は古来我が国民の愛花であり、我が国民性の表章であった。特に歌人が用いたる「朝日に匂ふ山桜花」という語に注意せよ。

大和魂は柔弱なる培養植物ではなくして、自然的という意味において野生の産である。それは我が国の土地に固有である。(略)その美の高雅優麗が我が国民の美的感覚に訴うること、他のいかなる花もおよぶところでない。薔薇に対するヨーロッパ人の讚美を、我々は分つことをえない。薔薇は桜の単純さを欠いている。さらにまた、薔薇が甘美の下に棘を隠せること、その生命に執着すること強靱にして、時ならず散らんよりもむしろ枝上に朽つるを選び、あたかも死を嫌い恐るるがごとくであること、その華美なる色彩、濃厚なる香気—すべてこれらは桜と著しく異なる特質である。我が桜花はその美の下に刃をも毒をも潜めず、自然の召しのままに何時なりとも生を棄て、その色は華麗ならず、その香りは淡くして人を飽かしめない。(略)

しからばかく美しくして散りやすく、風のままに吹き去られ、一道の香気を放ちつつ永久に消え去るこの花、この花が大和魂の型であるのか。日本の魂はかくも脆く消えやすきものであるか。

○ 武士道はなお生くるか

武士道は一の無意識的なるかつ抵抗し難き力として、国民および個人を動かしてきた。新日本の最も輝かしき先駆者の一人たる吉田松陰が刑に就くの前夜詠じたる次の歌は、日本民族の偽らざる告白であった―

かぐればかゝるものと知 ながら

やむにやまれぬ大和魂

形式こそ備えざれ、武士道はわが国の活動精神、運動力であったし、また現にそうである。(略)

日本の変貌は全世界周知の事実である。かかる大規模の事業にはおのずから各種の動力が入り込んだが、しかしその主たるものを挙げんとせば、何人(なんびと)も武士道を挙ぐるに躊躇しないであろう。全国を外国貿易に開放した時、生活の各方面に最新の改良を輸入したる時、また西洋の政治および科学を学び始めた時において、吾人の指導的原動力は物質資源の開発や富の増加ではなかった。いわんや西洋の習慣の盲目的なる模倣ではなかったのである。…タウンゼンド氏が、日本の変化を造り出したる原動力はまったく我が国民自身の中に存せしことを認識したのは、誠に卓見である。しかしてもし氏にしてさらに日本人の心理を精察したならば、氏の鋭き観察力は必ずやこの源泉の武士道に他ならぬことを容易に確認しえたであろう。劣等国と見下されることを忍びえずとする名誉の感覚、―これが最も強き動機であった。殖産興業の考慮は、改革の過程において後より目覚めてきたのである。

武士道の感化は今日でもなお、走者も読みうるほど容易に認められる。日本人の生活を一瞥すればおのずから明瞭である。日本人の心の最も雄弁にしてかつ忠実なる解釈者たるハーンを読み、しからば彼の描写する心の働きは武士道の働きの一例であることを知るであろう。至るところの人民の礼儀を重んずるは武士道の遺産であって、こと新しく繰り返すにおよばざる周知の事実である。「矮小ジャップ」の身体に溢るる忍耐、不撓ならびに勇氣は日清戦争において十分に証明せられた。「これ以上に忠君愛国の国民があるか」とは、多くの人によりて発せられたる質問である。これに対して「世界無比!」と吾人の誇りやかに答えるは、これ武士道の賜である。(略)

○ 武士道の将来

封建日本の道徳体系はその城郭と同様崩壊して塵土に帰し、しかして新道徳が新日本の進路を導かんがため不死鳥のごとくに起る、と預言する者があった。しかしてこの予

言は過去半世紀の出来事によって確かめられた。かかる預言の成就是望ましきことであり、かつ起りうべきことであるが、しかし不死鳥はただおのれ自身の灰の中から起きいのであって、候鳥でもなく、また他の鳥からの借り物の翼で飛ぶのでもなきことを忘れてはならない。(略)

武士道は一の独立せる倫理の掟としては消ゆるかも知れない。しかしその力は地上より滅びないであろう。その武勇および文徳の教訓は体系としては毀れるかも知れない。しかしその光明その栄光は、これらの廃址を越えて長く活くるであろう。その象徴とする花のごとく、四方の風に散りたる後もなおその香気をもって人生を豊富にし、人類を祝福するであろう。(略)

出典：『武士道』(新渡戸 稲造著矢内原忠雄訳・岩波文庫版、初版1938年、第99刷2012年年刊)

原文は英文で、“*Bushido: the soul of Japan, an exposition of Japanese thought*” 1900年にThe Leeds and Biddle Company, Philadelphiaで、翌年、日本でも出版された(裳華房)。その後、1915年に第10版で増補されてG.P.Putnamus Sons, New Yorkと日本の丁抹出版社から出され、さらに著者の没後、未亡人の序言を付したものが1935年に研究社から発行された。

日本語訳は1908年に櫻井鷗村訳が丁抹出版社から出されたが、1938年には著者の弟子、矢内原忠雄訳が1938年に岩波文庫版で出版された。ここで引用したのはその第99刷からである。

[著者略歴]

新渡戸稲造(1862—1933)、農学者、教育者。農学博士、法学博士。岩手県盛岡生まれ。幕末の南部藩士の子。札幌農学校卒(第2期生)。在学中に同期の内村鑑三とともに受洗。卒業後北海道開拓使に勤めたが、1884年東京帝国大学を中退して私費で渡米。ジョンズ・ホプキンス大学に学ぶ。1887年、札幌農学校助教授となりドイツに留学。アメリカ留学中にクエーカー派の世界に接し、メアリー・エルキントン(日本名:新渡戸万里子)と知り合い1891年に結婚した。同年帰国後、札幌農学校教授・台湾総督府技師・同殖産課長・京都帝国大学教授などを歴任したが、1906—1913年第一高等学校校長を務め、その人格主義教育は多くの生徒たちに感化を及ぼした。この間に東京帝国大学教授も兼任し、1911年に日米交換教授として渡米し活動した。1918年東京女子大学初代学長となったが、1919—1926年、国際連盟の事務局次長を務めた。辞任後、貴族院議員、太平洋問題調査会理事長などを務めたが、1933年、カナダで開かれる調査会に出席し、ビクトリアで客死した。この時期の日本人ではまれにみる国際人として活動した。

〔テキスト解説〕

この本は英文の原題“Bushido:the soul of Japan,an exposition of Japanese thought”にあるとおり、武士道を日本の魂(the soul of Japan)―「日本思想の解明」(an exposition of Japanese thought)―として欧米人に訴えるために英文で著され出版された。明治維新で西欧的近代化の道を歩み始めた日本への理解を欧米先進国人たちに向かって求めるとき、著者新渡戸はなぜ「武士道」を日本理解の核心として語ったのか。それはこの本の序文で著者自らが語っている。あるとき、ベルギーの法学者との雑談のなかで、日本では宗教教育なしに、どうして道徳教育が授けられるのかと尋ねられた。また、アメリカ人である妻からも日本人の思想や風習についてしばしば尋ねられてもいた。こういう質問に「満足なる答えを与えようと試みた」結果、日本の「封建制度および武士道を解することなくんば、現代日本の道徳観念は結局封印せられし巻物であると知った」というのである。だから、『武士道』は、原典引用の最初の部分にあるとおり、「第一章:道徳体系としての武士道」で第一に武士道の起源と淵源、第二にその特性、第三に民衆に及ぼした「感化」、第四にその「感化の継続性、永久性」、についての説明を目指したものになった。そこから、この本は、第二章／武士道の淵源にはじまり、ついで武士道が重んじる徳目を各論的にとりあげながら、その教育制度や一般への「感化」、さらに将来性へと説き進む構成をとった。すなわち、第三章／義、第四章／勇・敢為堅忍の精神、第五章／仁・惻隱の心、第六章／礼、第七章／誠、第八章／名誉、第九章／忠義、第十章／武士の教育および訓練、第十一章／克己、第十二章／自殺および復仇の制度、第十三章／刀・武士の魂、第十四章／婦人の教育および地位、第十五章／武士道の感化、第十六章／武士道はなお生くるか、第十七章／武士道の将来、という構成である。

もともと、日本で「武士道」といわれたものは、日本の中世社会に生まれた武士階級の個人的な生存や「一族郎党」の存続・発展を有利にする生き方の「術」を説くものに始まったが、近世社会(江戸時代)にいたって、「思想としての武士道」が体系化されていった。そこには、儒教・朱子学的倫理観(仁義・忠孝など)に基礎づけられ、体系化された武士の道徳観念と振る舞いを説く主流的な「武士道」のほかに、「武士道と云ふは、死ぬ事と見つけたり」で有名な『葉隠』のように極端な尚武思想に貫かれた「武士道」もあった。

近代化を目指し始めた明治以後の日本では、もちろん武士階級は解体されたが、思想としての「武士道」はおおむね三つの流れで残り、受け継がれていった。

第一は、福沢諭吉『瘦せ我慢の説』や自ら剣と禅をきわめ武士道的生き方を貫こうとした山岡鉄舟『武士道』などに見られる、「和魂洋才」でいう「和魂」にあたるとも言える流れである。第二は、日清・日露戦争の勝利などに影響された武士道論の流れである。井上哲次郎『武士道叢書』などがその典型で、天皇への忠誠と戦争・軍人の精神的支柱のために「葉隠」などを都合よく利用して忠君愛国を説いた流れである。「軍人勅諭」やアジア・

太平洋戦争中の「戦陣訓」などに典型的な「皇道的武士道」とでも言うべき流れである。

これらに対して第三の流れと言えるのが新渡戸稲造の『武士道』である。

新渡戸は、東京帝国大学入学時に、私は「太平洋の橋になり度いと思います。日本の思想を外国に伝へ、外国の思想を日本に普及する媒酌になり度いのです」と述べた(1907年著『帰雁の蘆』)というので有名だが、新渡戸のこの本はまさしく「太平洋の橋」になることを目指して「日本の思想を外国に伝へ」るために書かれた「武士道論」である。そのために引用部分からも推察されるように、多くの西欧の歴史・文学などを引用・対照し、キリスト教的倫理観と旧来の日本人の道德観念を合致させつつ、欧米人に理解しやすいように解説した。このことによってこの本は西欧と日本の比較文化論ともなっている。

この本には新渡戸の武士道に関する歴史考察の不十分さ・拙さや日本美化の傾向などがしばしば批判的論評として行われてきたが、明治期の日本人が世界に向かって発信した日本文化論の先駆的著作としての重要な歴史的 position を占めていることに疑いはない。

[参考文献]

- 新渡戸稲造『新渡戸稲造全集』 教文館 1969—2001。
- 石井満『新渡戸稲造伝』 関谷書店刊1935復刻 大空社 1992。
- 石上玄一郎『太平洋の橋—新渡戸稲造伝—』 講談社 1968。
- 松隈俊子『新渡戸稲造』 原著1969。みすず書房 2010。
- 東京女子大学新渡戸稲造研究会編『新渡戸稲造研究』 春秋社 1969。
- 鶴見俊介『鶴見俊介著作集』 筑摩書房 1975。
- 佐藤全弘『新渡戸稲造—生涯と思想』 キリスト教図書出版社 1980。
- 太田雄三『<太平洋の橋>としての新渡戸稲造』 みすず書房 1986。
- 鈴木康史『筑波大学体育科学系紀要』 2001。
- 船津明正 名古屋大学『言葉と文化』 2003。
- 草原克豪『新渡戸稲造1862—1993 我、太平洋の橋とならん』 藤原書店 2012。

東洋の理想

岡倉天心

○ 理想の範囲

アジアは一つである。ヒマラヤ山脈は、二つの強大な文明、すなわち、孔子の共同社会主義をもつ中国文明と、ヴェーダの個人主義をもつインド文明とを、ただ強調するためのみ分っている。しかし、この雪をいただく障壁さえも、究極普遍的なるものを求める愛の広いひろがりをも、一瞬たりとも断ち切ることはできないのである。そして、この愛こそは、すべてのアジア民族に共通の思想的遺伝であり、かれらをして世界のすべての大宗教を生み出すことを得させ、また、特殊に留意し、人生の目的ではなくして手段をさがし出すことを好む地中海やバルト海沿岸の諸民族からかれらを区別するところのものである。

回教徒による征服の時代に至るまで、ベンガル湾沿岸の大胆剛勇な船乗りたちは、太古以来の海の公道を往き、セイロン、ジャバ、スマトラにかれらの植民地を開き、アーリアの血をビルマやシャムの沿岸諸民族の血と混ぜ合わせ、また中国とインドとを相互交通に於てたたく結びつけていたのであった。……

けだし、もしアジアが一つであるとするならば、アジアの諸民族が力強い単一の組織をなしているということもまた真である。分類万能の時代にあつて、われわれは、型というもの、結局、近似せるものの大海にあつて際立って輝く点にすぎず、心理上の便宜のために、崇拜さるべく故意に設(もう)けられた偽りの神であり、たがいに入れ換え得る二つの学問の別々の存在と同じく、究極的な、あるいは相互に排他的な、妥当性を持つものではないことを、忘れていた。もしデリーの歴史が、回教世界に対する韃靼人の強圧を表すものとすれば、バグダッドとその偉大なサラセン文化の物語は、地中海沿岸のフランク民族を前にして、ペルシアのみならず中国の文明と芸術とを宣揚するセム諸族の力を、ひとしく意味するものであることもまた、思い出されなくてはならない。アラビアの騎士道、